

## 2 弥生集落の諸相

## ⑥奈良盆地 唐古・鍵遺跡

● 豆谷和之

唐古・鍵遺跡は、奈良盆地のほぼ中央部に位置する弥生時代の環濠集落である。奈良盆地、とくにその東南部には、拠点集落とよばれる大規模な弥生遺跡がひしめくことで知られる。天理市平等坊・岩室遺跡、橿原市中曾司遺跡、同新沢一町遺跡などは、古くより学界に周知され「大和の弥生遺跡」として注目されてきた。そのなかにあって、ひとときわ光彩を放つのが唐古・鍵遺跡といえよう。居住域の周囲を巡る環濠帯まで含めた面積は42万 $\text{m}^2$ に及び、弥生時代最大級の環濠集落と目されている。発掘調査は、昭和11・12年の唐古池土取工事にとまなう第1次から今日（平成20年）までに第103次を数えるが、その合計調査面積は約3万 $\text{m}^2$ と全面積の1割にも満たない。にもかかわらず、検出された遺構・遺物は華々しい。居住域の周囲を取り囲んだ大規模な環濠帯、大型建物跡、青銅器鑄造関連遺構・遺物、全国出土数の1/3を占める絵画土器等といった特異性は、研究者のみならず一般の注目をも集めてきた。土器・石器・木器といった普遍的な遺物においても、その量たるや他集落を凌駕している。

近年の「弥生都市論」に寄与するところは大きく、唐古・鍵遺跡が奈良盆地のみならず近畿地方の中心的な弥生集落であることは、誰もが認めるところである。それは遺跡自体がもつ潜在価値のみならず、調査に携わった先人達の努力が築き上げたものである。その研究史をたどることから、叙述を始めたいと思う。

## 1. 研究史

## (1) 調査

唐古・鍵遺跡が、学界に認知されたのは古く、明治34年の『考古界』に発表された高橋健自の「大和考古雑録」（高橋 1901）に始まる。その後、鳥居竜蔵（鳥居 1917）・森本六爾（森本 1924ab）・上田三平（上田 1928）らが小規模な発掘調査を行っているが、「唐古遺跡」の名を著名にしたのは、昭和11年に始まる国道敷設のための土取工事に端を発した唐古池の発掘調査であろう。調査は、奈良県と京都帝国大学の共同で行われ、末永雅雄をはじめとして小林行雄、藤岡謙二郎らが携わった。池底の豎穴から、弥生土器と木製農具が伴出したことによって、弥生文化が原始農耕社会であったことが実証された。また、豊富な弥生土器は、唐古五様式編年として編み上げられ、近畿弥生土器編年の基礎になった。

奈良県の農村部にあった「唐古遺跡」は高度経済成長期の開発を免れ、途中で小規模な第2次調査と分布調査を挟むが、第3次調査が行われる昭和52年まで手つかずの状態にあった。幼稚園の

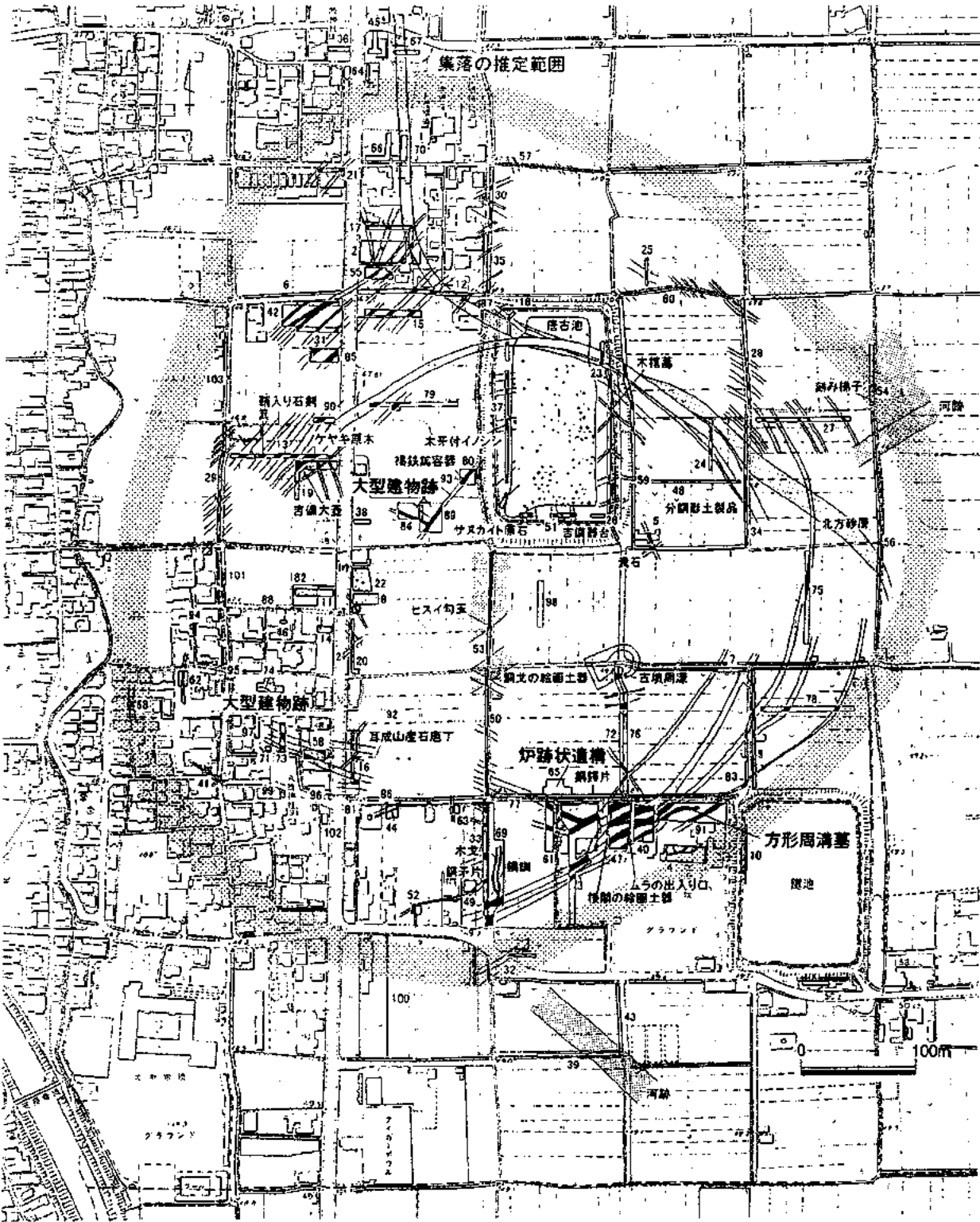


図1 唐古・鍵遺跡の調査区位置図 (藤田 2007 に一部加筆)

新築工事にもなう第3次調査では、集落南端を画したと考えられる大溝とともに、銅鐸など青銅器を製作したと考えられる土製鋳型外枠が出土した。この調査により、「唐古遺跡」が大字鍵にまで広がることが確実となり、遺跡名は「唐古・鍵遺跡」に改められた。また、近畿地方では数少ない青銅器生産に関わった弥生遺跡と判明し、その重要性が再認識されたことによって、国史跡指定を前提とした国庫補助金による範囲確認調査が継続して行われる発端となった。田原本町を事業主

体として、檀原考古学研究所が発掘を請け負う体制は、昭和57年第12次調査までつづいた。この間、遺跡南東側では水路工事にともない第9次調査が行われ、環濠と考えられる大溝が検出されたことによって、第3次調査の成果とあわせてほぼ遺跡南側の範囲を推定できるようになっていた。

昭和57年7月からは、専門職員を配属した田原本町が独自で発掘調査を行うことになった。その最初の第13次は国道の西側で行われた民間開発にともなう緊急調査であったが、5条に及ぶ環濠を検出し、遺跡西側の範囲を確定できたことは幸運といえる。範囲確認調査として昭和61年に第24次、昭和62年に第27次を行い、遺跡東側の環濠を把握していった。昭和62・63年には第33次調査で遺跡南側の環濠を確認し、範囲確認調査を一旦終了させた。

範囲確認調査は一段落したものの国史跡指定は足踏み状態にあり、遺跡範囲内では農業基盤整備や国道沿いの民間開発、南東に位置する小学校施設の改修など蚕食される一方で、皮肉なことに徐々にその重要性が判明していった。小学校施設の改修にともなう第40・47次調査では、第3次と第9次を繋ぐ環濠帯を検出するとともに、二階建ての建物（楼閣）を描いた絵画土器が出土し（第47次）、考古学界のみならず世間一般にも話題を与えた。

平成8年からは、唐古・鍵遺跡の国史跡指定が具体化する一方で、集落内部の解明が不十分であるため、国庫補助金による内容確認調査が行われることとなった。第61・65次は青銅器工房跡を、第80次は大型勾玉2個を入れた褐鉄鉦容器を、第84・89・93次は弥生時代中期中葉の大型建物跡を検出し、華々しい成果をあげている。なお、忘れてはならないのは、こうした大々的な発掘調査の一方において、町下水道課の事業にも対応し、即日埋め戻しが要求される開削工事の第88・101次調査、マンホール部分における狭小な面積の第86・95・97・99次調査、夜間工事立会が地道に行われてきたことである。こうした小規模な調査の積み重ねが、民家の密集する現鍵集落内での遺跡内容を明らかにしている。そして、田原本町役場による地元との粘り強い交渉のすえ、唐古・鍵遺跡は平成11年1月27日に国史跡に指定された。

唐古・鍵遺跡の集落構造および変遷については、各調査担当者がそれぞれに検討を行っている。次に、遺跡に関する論考を概観する。

## (2) 考 察

寺沢薫は、第20次調査までの段階（東南・西環濠帯の確認および国道24号線周辺の成果）で、唐古・鍵遺跡における三つの微高地案（寺沢1986）を提示しており、これが以後の唐古・鍵遺跡の復元案に大きな影響を与えている。寺沢は、唐古池東側で行った第5次調査、遺跡西側の国道沿いで行った第8・11次調査で検出した黄褐色（概要では黄灰色）土の上面において弥生時代全般にわたる多数の遺構を検出した。このうち、第8・11次では、唐古池の第1次調査と同じく弥生時代前期の土坑群を検出したことから、黄褐色土を安定した微高地であると考えた。一方、遺跡範囲の東側で行った第7次調査では、弥生時代中期の砂層を検出し、集落内に河川が流れ込んでいることを把握している。このように自らが行った第3～11次までの成果にもとづき、遺跡内にA・B・Cの三つの微高地を想定した。そして、段階発展的に、前期における微高地への入植、中期における遺跡内を流れる河川の埋没とそれにとともなう居住域の拡散、後期における遺跡範囲内の安定と居住

域の拡大という集落の変遷を描いた。

寺沢の調査を引き継いだ藤田三郎は、第25次調査が終わった段階（西環濠帯につづき東環濠を確認）で、遺跡の変遷（藤田1987・1989）を示した。藤田は、寺沢が想定した三つの微高地とほぼ対応する北地区（＝微高地A）、西地区（＝微高地B）、南地区（＝微高地C）の三地区を設定し、これらを弥生時代前期には生産から消費までが独立した三つのムラであったとする。そして、弥生時代中期中葉における大環濠が三つのムラ全体を囲うことから、一つのムラに統合されたと考えた。ただし、藤田は大環濠による統合後も、三地区にはそれぞれ中心があって独立性は維持されているとし、各地区の機能分化を想定する。第1次調査の北方砂層および第13・19次調査の北西環濠を埋没させた砂層の検出から、それを弥生時代中期後葉においてムラ全体を覆った洪水の証とし、埋没した環濠の弥生時代後期初頭における再掘削をもってムラの再建と更なる拡大と見た。こうした環濠も弥生時代後期の終わり頃には埋没し、古墳時代前期にはふたたびムラが三つ微高地に分散すると論じている。この集落変遷案は、史跡指定を目的とする範囲確認調査によって居住域縁辺で把握した環濠の消長が、大きな指標となっている。

藤田は、範囲確認調査が終了後（南環濠を確認しほぼ範囲が決定）に再び、新知見を得た南地区の詳細も加え、集落変遷（藤田1990）を示した。藤田は、高橋学による微地形復元を加えて遺跡の変遷案を補強し、より詳細に形成・分立・統合・発展・衰退の5期に区分した。ただし、当初の集落変遷案からの大幅な変更はない。後には、遺跡中央部を南北に貫いた通学路整備にともなう第50・53次調査で弥生時代前期の落ち込みを検出し、遺跡中央部が窪地であったという考えを追加している。

やや冗長にすぎた感もあるが、私が研究史を重視するのは、それらの積み重ねがあって現在の唐古・鍵遺跡が形作られたと考えるからである。唐古・鍵遺跡は、弥生時代の全期間（少なく見積もっても600年）に及ぶ生活痕跡の累積であり、異なる調査地点において検出した遺構の同時性を検証することは、きわめてむずかしい。我々は、発掘調査の技術と机上における解釈という2度のふるいを通して、唐古・鍵遺跡を把握する。ここに過去の集落としての唐古・鍵遺跡と、発掘調査・分析を通して再構築された唐古・鍵遺跡の二つが生じるのである。また、再構築には唐古・鍵遺跡の知見だけでなく、他の遺跡の調査成果あるいは弥生研究の進捗も影響を与えている。時代によって遺跡の評価は変わりうる。

唐古・鍵遺跡は、昭和52年から昭和63年までの約10年間の範囲確認を主とする発掘調査によって遺跡変遷の大枠が定められ、これにもとづき以後20年の発掘調査は進められてきた。私は、昭和60年の学生アルバイトに始まり、平成8年からは調査員となって今日まで唐古・鍵遺跡に携わってきた。再構築された唐古・鍵遺跡の大枠を覆すことは同時代を生き、同遺跡を掘ってきた私には不可能である。もし、再構築された唐古・鍵遺跡の大枠が覆るのであれば、新知見の蓄積や弥生研究全体の進展を受けた次世代によって成されるものとする。ただし、これまでの研究史と内容が同じというのであれば、本論の必要はない。平成8年から平成16年にかけて行われた内容確認調査では、部分において新たな知見が加わっている。以下、いくつかの要点としてそれを示す。

## 2. 環濠と溝

唐古・鍵遺跡では、直径約400mにおよぶ居住域の周囲を、環濠とよばれる大溝が幅約100mに渡って幾重にも取り巻いている。藤田はこれを「環濠帯」とよんだ。そのうち、居住域に接した環濠は「大環濠」とよばれ、幅8m前後、深さ1.5m前後にも及ぶとりわけ大規模なもので、居住域の内と外を画する役目をもっていたと想定されている。こうした、居住域の周囲をめぐる大溝とともに、居住域内においても多数の溝を検出することができる。その規模は、環濠に匹敵するものから痕跡程度のものまで、大小さまざまである。私は、環濠のみならず居住域の溝まで含め、これこそが唐古・鍵遺跡を大規模拠点集落たらしめるものと考えている。

### (1) 居住域の溝

奈良県内の小規模な集落、あるいは短期的な集落において、溝を検出することはない。たとえば、山間部の小規模な継続集落である吉野町宮滝遺跡や、五條市原遺跡、弥生時代中期後葉の短期的な集落である三宅町伴堂東遺跡、田原本町清水風遺跡など、環濠はおろか居住域内の溝もほとんど認められない。削平による影響も予想されるが、これらの遺跡では竪穴住居跡や土坑が検出されているのであり、それよりも浅い溝となれば自ずからその幅も限定されよう。これに対し、唐古・鍵遺跡では、周囲を巡る環濠だけでなく、居住域内において大小多数の溝が検出される。

#### a. 住居排水（小溝）

例 第8次中期小溝群、第65次SD-103・103B

#### b. 区画溝および基幹排水（中溝）

例 第79次SD-103、第80次SD-101・106

#### c. 区画溝および基幹排水（大溝）

例 第61次SD-151A・151B・151C、第98次SD-101

溝のある集落とない集落、その差には不可分にある二つの要因が想定できる。一つは、集住による排水処理の問題である。住居が散漫であるならば、雨水は周囲の下草の葉や根に吸収され、さほど排水を考慮する必要はない。住居からの小溝が傾斜地で途切れ、垂れ流しとなっても問題はあるまい。これに対し、住居が密集した場合、裸地の占める割合は高く、雨水を計画的に排水せねばぬかるんだことだろう。さらに、唐古・鍵遺跡クラスの大規模拠点集落ともなれば、その居住域には地形の起伏をいくつも含んでおり、集落外への排水路の完備は必須であったと考えられる。

もう一つは、溝を掘削する労働力の問題がある。小規模な集落では、上述の理由から溝を掘削する必要もないが、そのための労働力を集約させること自体が不可能である。これに対し、大規模集落は集住により、住居排水から基幹排水（中溝から大溝）、そして環濠を整備するだけの労働力を集約させることが可能である。逆の見方をすれば、労働力を消費してまで、その地に人が集住し続けているともいえよう。私は、環濠も含め大規模拠点集落における溝の掘削とは、複数集団からなる共同体を維持していくための装置（豆谷 2003）と考えている。

## (2) 環 濠

大規模拠点集落を取り巻く環濠については、争いのための防御施設とする意見が根強くある。一般書や博物館の絵では時として、土塁の巡らされた環濠部分が裸地となっており、そこで弥生人の争う姿が描かれている。はたしてそうであろうか。唐古・鍵遺跡では、直径約 400m ほどの居住域を囲む幅 100m に及ぶ環濠帯が想定されている。こうした広大な空間で、現代のように草刈機や除草剤もなく、コンクリートも張ることなく、裸地を維持することは不可能と考える。環濠に樹木を想定しないのは、赤裸の発掘状況から刷り込まれたイメージ不足か、それとも弥生時代の「戦争」を意識し防御施設ととらえたためであろうか。唐古・鍵遺跡の調査では、環濠の機能を考える上で、防御としてはいささか不都合な知見を得ている。

### ①環濠帯の役目 1

唐古・鍵遺跡において環濠堆積土の中層は、ほとんどが黒褐色粘土の植物層となっている。植物層は、落ち葉や小枝の集積によって形成されたものである。遺跡北西部で行った第 85 次調査でも、並走する 2 条の環濠 SD-101・102 の中層は、厚い植物腐食土層となっていた。この植物腐食土層については、唐古・鍵遺跡共同研究会の事業として諸関連分野からの分析が進められており、一部は報道等で公にされている。

植物分野の検討委員である奈良教育大学の金原正明は、植物層の花粉分析を行い、その成果を日本文化財科学会第 21 回大会で発表している。金原によれば、第 85 次調査 SD-101・102 の植物層から、エノキ・ムクノキ・クスギやコナラなど樹木花粉が検出され、環濠帯は二次林に覆われていた可能性が高いという。このような例は、唐古・鍵遺跡だけに止まるものではない。奈良盆地の拠点集落の一つである橿原市四分遺跡の北側環濠でも金原による花粉分析（金原ほか 1996）が行われており、内濠からは草本類の花粉が検出されるが、外濠からはカシ・シイ・トチノキ・クリ・コナラ・ムクノキ・カバノキ・ケヤキ・スギ・コウヤマキ・ツガ・イチイ・イヌガヤ・ヒノキの仲間等の樹木花粉が検出されている。唐古・鍵遺跡環濠帯と四分遺跡外濠は、樹相に共通性が認められる。このように二次林に覆われた環濠では、夏場どころか落葉する冬場も幹が邪魔となって居住域内側から外側への眺望は効かず、防御においてはむしろ不利であったといえよう。

環濠帯の自然環境については、昆虫遺存体からも整合性が得られている。昆虫分野の検討委員である橿原市昆虫館の木村史明は、同植物層のブロック割によって昆虫の遺存体を検出することに成功した。その一部成果は、橿原市昆虫館の平成 14 年度特別展「光り輝く昆虫たち」で、実物展示によって公表されている。木村の選別によれば、コクワガタ・オオスズメバチなど樹液に集まる虫や、クロツヤハネカクシやオオハアリといった朽木に住む虫が確認された。また、ヤマトタマムシの羽も検出しており、その食樹となるエノキあるいはケヤキが生えていたことを示している。

これらの分析から、弥生時代中期において唐古・鍵遺跡の環濠帯、少なくともその北西部は雑木林となっていたことが判明した。こうした雑木林について、弥生人はまったく無関与だったのであろうか。居住域において日常的に必要であり大量に消費されたであろう薪、あるいは木製品や建築部材の材料はどこから調達していたのか。たしかに、集落外部に森は点在したであろうが、その運搬路や他集落との競合を考えた場合、より近場で水路等の整備が成された供給地が必要ではないか。

弥生時代は田畑といった食料生産に目が向きがちであるが、平野部における大規模拠点集落の木材利用を考えた場合、ある程度の森林管理が行われていたことを想定することは、かならずしも的はずれなことではあるまい。集落末端の後背湿地を人工的に掘り割ることは、結果的に高燥化させ二次林の生育しやすい環境が生み出されている。環濠帯とは、水路であるとともに人工的につくり出された雑木林としての要素も併せもち、近世農村の入会地に対応するような集落の共有地であったと考えられる。

## ②環濠帯の役目2

遺跡南東部で行った第91次調査では、環濠間において方形周溝墓を検出している。弥生時代中期初頭～中期前葉に掘削された環濠SD-102・104は、約20mの間隔をもって北東から南西方向に併走していた。この環濠間において、弥生時代中期前葉の方形周溝墓を2基(+1基の可能性あり)検出した。方形周溝墓は、環濠間に周溝を含めた全体が収まり、環濠走行方向と墳丘の軸が一致することから、意図的に配置されたものと考えられる。

これまでも、環濠帯付近からは、第13次SK-02の人骨や第33次SK-120の土壙墓、あるいは土器棺の検出があり、墓域としての利用は想定していたが、方形周溝墓に関しては予想外であった。これでは、環濠間に土壙を築くことは不可能であり、防御の要を成さない。環濠帯すべてに方形周溝墓が築かれているわけではなく、これが例外であるのかわからないのかは、検討の必要があろう。環濠間に方形周溝墓をもつ類例としては、石川県小松市八日市地方遺跡がある。

なお、これまで唐古・鍵遺跡においては方形周溝墓が検出されないことから、その遺跡範囲より1kmほど離れて検出された清水風遺跡や法貴寺遺跡、阪手東遺跡の方形周溝墓を墓域として想定してきた。大規模な居住域を誇る唐古・鍵遺跡においては、それなりの説得力をもっていたが、環濠帯を含めた集落縁辺部を再検討する必要がある。

## 3. 建 物

唐古・鍵遺跡における内容確認調査は、居住域内での面的な調査を可能にした。その結果、これまで唐古・鍵遺跡においては、実態が不明であった建築遺構を明かにすることができた。竪穴住居跡や掘立柱建物跡とともに、特筆すべき大型建物跡も検出している。ここでは、特殊な大型建物跡と一般的な竪穴住居跡について述べる。

### (1) 大型建物跡

唐古・鍵遺跡では、第74次と第93次調査において大型建物跡を検出している。両者ともに遺跡西部での検出であるが、直線距離にして200m離れている。

#### ①第74次大型建物跡

平成11年に個人住宅建築にともなう発掘調査で検出した。ほぼ南北に軸をもち、平面は梁間2間(7.0m)、桁行6間(11.4m)以上の長方形で、床面積は79.8m<sup>2</sup>以上である。独立棟持柱については、南妻側は調査区外となるため未確認であるが、北妻側で検出している。両側柱列以外にも棟通りに

柱列をもち、総柱式の構造とされる。ただし、柱列は、桁方向には通るが、梁方向は棟通りがずれて通らない。柱穴は、東側柱列で5基、棟通り柱列で4基、西側柱列で6基、北妻側独立棟持柱1基の計16基を検出している。柱穴掘方の形状は、両側柱穴が長軸2m前後、短軸1.5m弱の長楕円形、棟通り柱穴が径1.5m前後の不整形円形である。このうち、4基に柱根が遺存していた。両側柱ともに北妻側から4基目の柱根が現位置を留め、北東隅柱および北妻側独立棟持柱の柱根は倒されていた。いずれも、柱根径は60cm前後である。柱の樹種は、北妻側独立棟持柱の柱根はヤマグワ、他の3本がケヤキである。

## ②第93次大型建物跡

平成15年に範囲確認調査で検出した。東西-北東に軸をもち、平面は梁間2間(約6m)、桁行6間(約13.2m)の長方形で、床面積は約80m<sup>2</sup>を測る。独立棟持柱はもたない。両側柱列以外にも棟通りに柱列をもち、総柱式の構造とされる。第74次調査大型建物跡と同じく、柱列は、桁方向には通るが、梁方向は棟通りがずれて通らない。柱穴は、東側柱列で10基、棟通り柱列で6基、西側柱列で7基の計23基を検出している。西側柱列に対し、東側柱列の柱が3基多いのは、後に添えられた間柱であると考えている。柱穴掘方の形状は、両側柱穴が長軸3m前後、短軸1.5m前後の隅丸長方形、棟通り柱穴が径1.8m前後の不整形円形、東側柱列の間柱とするものは径1m前後の不整形円形である。このうち、18基に柱根が遺存しており、うち2本は倒されていた。柱根径は45~80cmである。倒された北西隅柱は太く、径83.2cmを測る。柱の樹種はいずれもケヤキである。

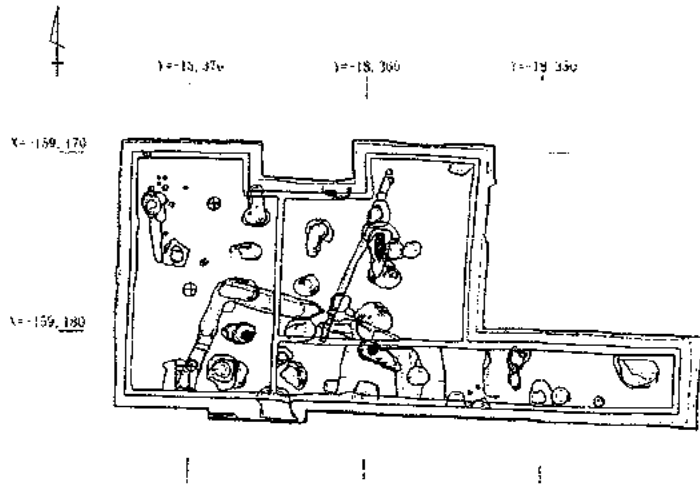
## ③大型建物の類例

唐古・鍵遺跡における大型建物跡で公表されたのは前出の2棟である。しかし、単独の大型柱穴を複数基検出しており、これが大型建物跡の一部である可能性は高い。

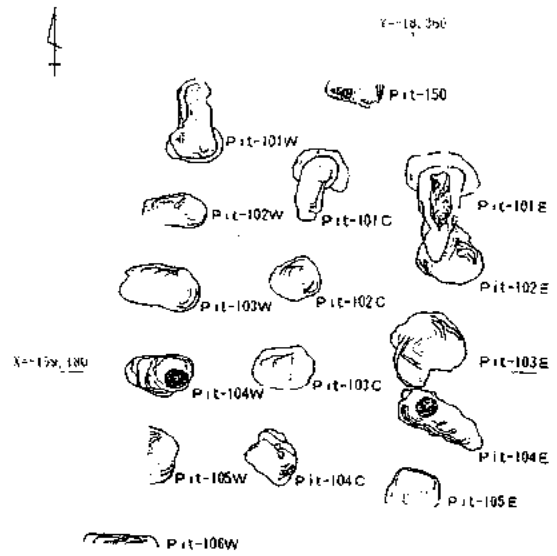
第93次調査は、第84次調査で大型柱根を検出したことに端を発し、第89次と拡張を経て大型建物跡の全容を明かにするに至った。その際、第84次・第89次において、第93次調査検出の大型建物跡とは無関係の大型柱穴および柱根を3基検出している。3基は位置的に、それぞれ別棟のものとなる。時期等は不明であるが、弥生時代後期まで下ることはなく、おそらく第93次調査検出の大型建物跡を前後するものと考えられる。大型建物付近には、先行大型建物あるいは同規模の大型建物が近接していることは、大阪府池上曾根遺跡や兵庫県武庫庄遺跡の例から知ることができる。なお、唐古・鍵遺跡では現在の知見から、大型建物跡のものと考え得る柱穴を検出していた調査事例がある。遺跡西部で行った第22次調査の柱根と礎板をとまなう土坑SK-205で、出土土器は前期末を示し、弥生時代で最も古くさかのぼる大型建物跡の可能性があろう。

奈良盆地においては、現在のところ唐古・鍵遺跡以外に弥生時代の大型建物跡が検出された報告はない。ただし、四分遺跡第59次調査において、柱根の直径は25cmであるが、その掘方が1.3mに達する弥生時代中期中葉の大型柱穴が検出されている。私は、これを大型建物跡の柱穴であると考えている。この四分遺跡例で注目すべきは、その立地状況である。第59次調査地は弥生時代中期の東環濠に近接した地形の落ち際にあつて、それより西側の遺構が密集した微高地と比較するならば、あまり立地状況はよいとはいえない。後の弥生時代後期には水田域へと変貌していることからそれはうかがえよう。

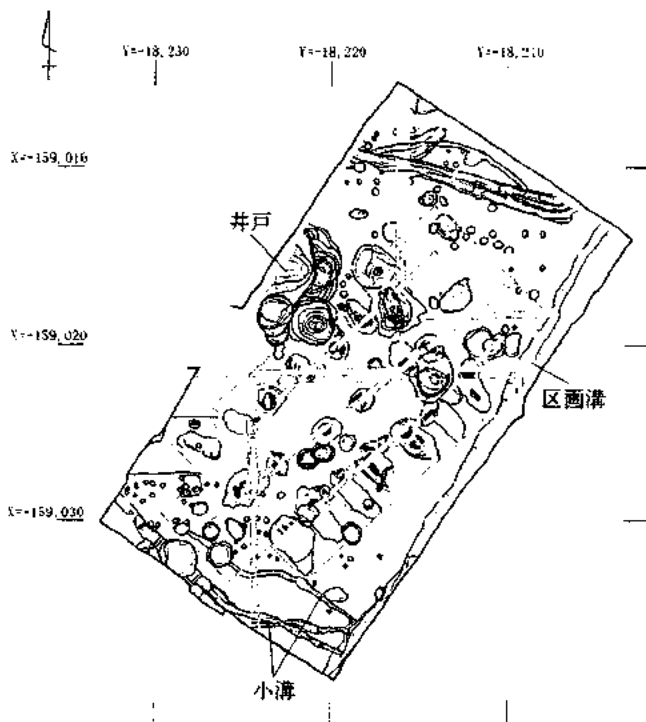




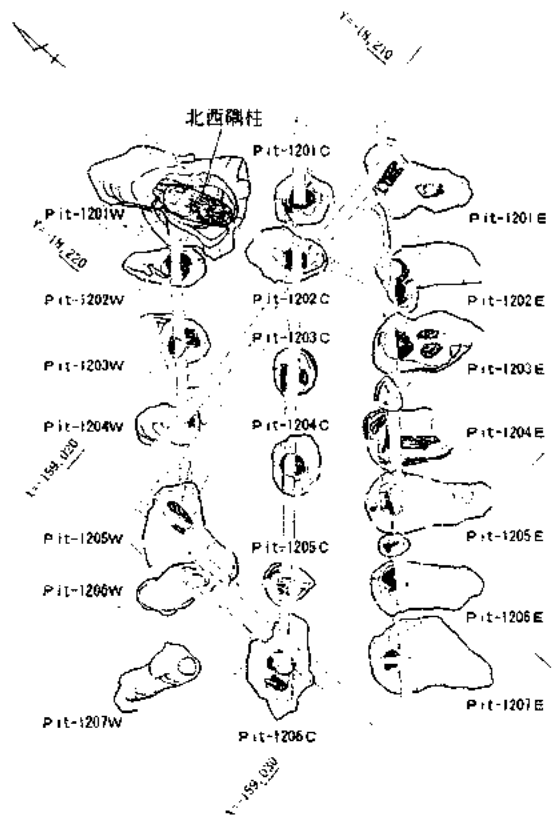
1. 第74次調査区



2. 第74次大型建物跡



3. 第93次調査区



4. 第93次大型建物跡

図2 第74・93次調査の大型建物跡 (豆谷 2006 に一部加筆)

## ④ その立地と周辺施設

橿原市四分遺跡の例でも述べたが、大型建物跡の立地状況はあまりよいとはいえない。唐古・鍵遺跡第74次調査の大型建物跡は、周辺ではその北東側の第14次および第20次調査付近が最も高所と考えられるが、それより一段下がった南側に位置し、南地区と西地区を画していたと考えられる区画溝群に近接している。第93次調査の大型建物跡についても、微高地の中心は建物の西側であり、建物自体は微高地の東端を画した区画溝の西側に隣接している。大型建物跡は立地的には微高地の最高所ではなくその落ち際にあつて、溝に隣接する可能性がある。このことは奈良県下だけに止まらず大阪府池上曾根遺跡の大型建物跡が、地形の落ち際に位置することとも関連しよう。

なお、第93次調査の大型建物跡が東側の区画溝と近接し軸をあわせることと関連して、方形区画との問題についても触れておく。私は、巷で膾炙される弥生時代中期の方形区画については懐疑的である。というのも、第93次調査の大型建物跡にあわせて区画溝が掘られているのではなく、建物が区画溝にあわせて建てられていると考えられるからである。これは、柱穴掘方と溝最下層から出土した土器の比較からも明らかである。なお、南妻側に沿って併行する2条の小溝を検出しており、兵庫県加茂遺跡の大型建物跡例から竪板塀等を想定する考え方もあるかもしれない。しかし、「2. 環濠と溝」でも述べたが、大型建物の周囲が裸地であり、その大屋根からの雨水を考えるならば、排水施設を整備するのは必然といえる。

## ⑤ 大型建物跡の本質

弥生の大型建物跡の機能については、首長居館や公共施設など、さまざまな意見が提示されている。外山秀一は、池上曾根遺跡の大型建物跡周辺の土壌から多量に穎稻のプラントオパールを検出し、倉庫の可能性を示唆（外山 1996）している。この点について、私は先述した大型建物跡の立地が居住域の縁辺部や溝に接する状況と整合性をもたせ、居住域外からの収穫物を搬入し、積み卸しに適していたと見ている。さらに、居住域から離れて大型建物跡が集中する傾向は、収穫物を共同体の所有とし倉庫群で管理していた可能性を想定する。

また、池上曾根遺跡の大型建物跡におけるクスノキくり抜き井戸との関係や、唐古・鍵遺跡から北方に約700m離れた清水風遺跡で出土した絵画土器には「盾と戈をもつ人」とともに大型とおほしき多数の柱をもつ建物が描かれることから、大型建物には祭祀的性格もうかがわれる。私は、大型建物をもつ祭祀的性格と倉庫という実用性は矛盾するものではなく、共同体の管理物であったからこそ、そこがマツリの場になったと考えている。と、このように大型建物跡の機能に関しては、どうしても屋上屋を重ねたものにならざるを得ない。そこで、少し視点を変え、大型建物の建築にかかる労力からその本質について論じてみたい。

「弥生の大型建物とは何か」という問いに対する私なりの解答は、2枚の写真にある（図3）。同一女性が、一つは唐古・鍵遺跡第93次調査で検出した大型建物跡の柱根の前で寝そべり、一つは同町内東井上遺跡第1次調査で検出した弥生時代後期竪穴住居跡の柱根を手にもっている。この一目瞭然の対比こそが、大形建物の本質を物語ると考える。

唐古・鍵遺跡第93次調査の大型建物跡にともなった北西柱隅柱は、直径83.2cmの太さを持ち、その基部には2孔1対の目渡孔を有している。柱穴の大きさは長軸3m、短軸2mである。これに対

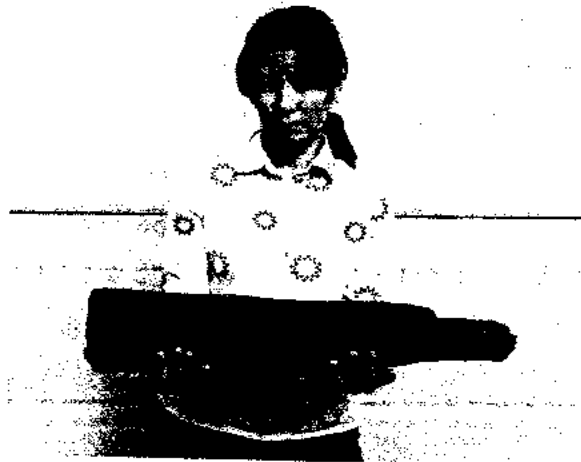


図3 柱根における二者  
上 唐古・鍵第93次 下 東井上第1次

建物の建築とは、溝の掘削と同じく、共同体全体の作業だったといえよう。

## (2) 竪穴住居跡

さて、居住域における特殊性として大型建物跡を取り扱ったが、むろん唐古・鍵遺跡に竪穴住居がなかったわけではない。概要報告等の平面図を一見すると竪穴住居跡が見あたらないように思われるが、これは切り合いが激しいことによって、竪穴としての平面形が検出できないだけのことである。灰穴炉と考えられる炭灰を多量に含んだ土坑と、その周囲に放射状に散らばる柱穴から、竪穴住居跡の単位を読み取ることは可能である。

こうした特徴をもとに復元されたのが、第61・65・79・98次の住居跡である。このうち、遺跡中央部で行った第98次調査の竪穴住居は、炭灰土坑を中心として半径約1.5mの円周上にある柱穴4基に柱根が残存しており、これより直径4.6mほど平面規模が想定される。他の調査における住居跡についても、炭灰土坑を中心とする柱穴は半径2mほどであり、唐古・鍵遺跡における竪穴住居跡の規模は5～6mが一般的であったと考えられる。

なお、遺跡地南部で行った第65次調査地の中央において検出された弥生時代中期中葉の竪穴住居跡は、その北東側において周壁の立ち上がりを確認することのできた唐古・鍵遺跡では希有な例である。さらに、この周壁の立ち上がりから、約1.8mの間隔をもって併行する小溝があり、その先端は第3次調査地へと延びている。小溝は幾度かの再掘削を受けており、竪穴住居跡の建て替え

し、東井上遺跡第1次調査の弥生時代後期竪穴住居跡にともなった柱根は、直径13cmである。柱穴の大きさは径0.3mであった。私は、大型建物の本質とは、床面積の大小にあるのではなく、柱の太さが示すように、その建築にあたって必要以上の労力を有するものとする。

竪穴住居跡の直径13cmの柱材であるならば、2人で持ち運びが可能であり、隙間のほとんどない径0.3mの柱穴ならば自立も可能であろう。これに対し、大型建物跡の直径83.2cmの柱材は、先端がそり状に加工され、目渡孔に残るつるが示すように、多人数による牽引が必要である。また、柱の引き起こしのために柱穴は必要以上に大きく、柱の自立は不可能であったと考えられる。さらに、小型の井戸にも匹敵する柱穴を20基も必要としている。このように、竪穴住居がそれに居住する単位の人材で建築が可能であるのに対し、大型建物の建築には少なくとも地区単位（あるいは集落規模か）の労働力を必要としている。大型

と対応しているようである。おそらくは、竪穴住居の北東側からの雨水を受けるとともに、竪穴住居の垂木先に対応して屋根からの雨水も受けていたと考えられる。竪穴住居跡と小溝の間隔 1.8m が、周堤帯の幅と想定されるのである。さらに、図面を検討していたところ、小溝の北西端と北東に延びる分岐小溝の先端に、炭灰土坑とこれを取り巻く柱穴があることに気がついた。小溝を共有して、枝銭状に配置された竪穴住居跡が復元が可能である。これが、唐古・鍵遺跡における竪穴住居一戸以上、地区以下の世帯共同体とでもいうべき単位となろう。

#### 4. 専門性

##### (1) 青銅器生産

弥生時代において、誰もが認めうる専門性の高いものとして、青銅器生産がある。唐古・鍵遺跡では南部において、第 3・40・47・61・65・77 次という約 20 年間にわたる調査の末に、第 65 次調査地を中心とする約 30m 四方の範囲を、青銅器生産の工房跡とほぼ確定するに至った。また、青銅器鑄造関連遺物は、包含層および中世素掘溝以外では弥生時代中期末から後期初頭の遺構からの出土であり、この時期に青銅器生産は限定される。

とはいえ第 65 次調査では、弥生時代中期の竪穴住居跡および溝や土坑、弥生時代後期の方形周溝墓といった遺構が錯綜するなか、わずかに長方形を呈する焼土面を調査地中央付近において確認したにすぎない。しかし、鑄型土製外枠、高坏型土製品（とりべか?）、鉍滓付着真土といった青銅器鑄造関連遺物は、第 65 次調査地の中央付近に集中していた。この調査地から同心円状に青銅

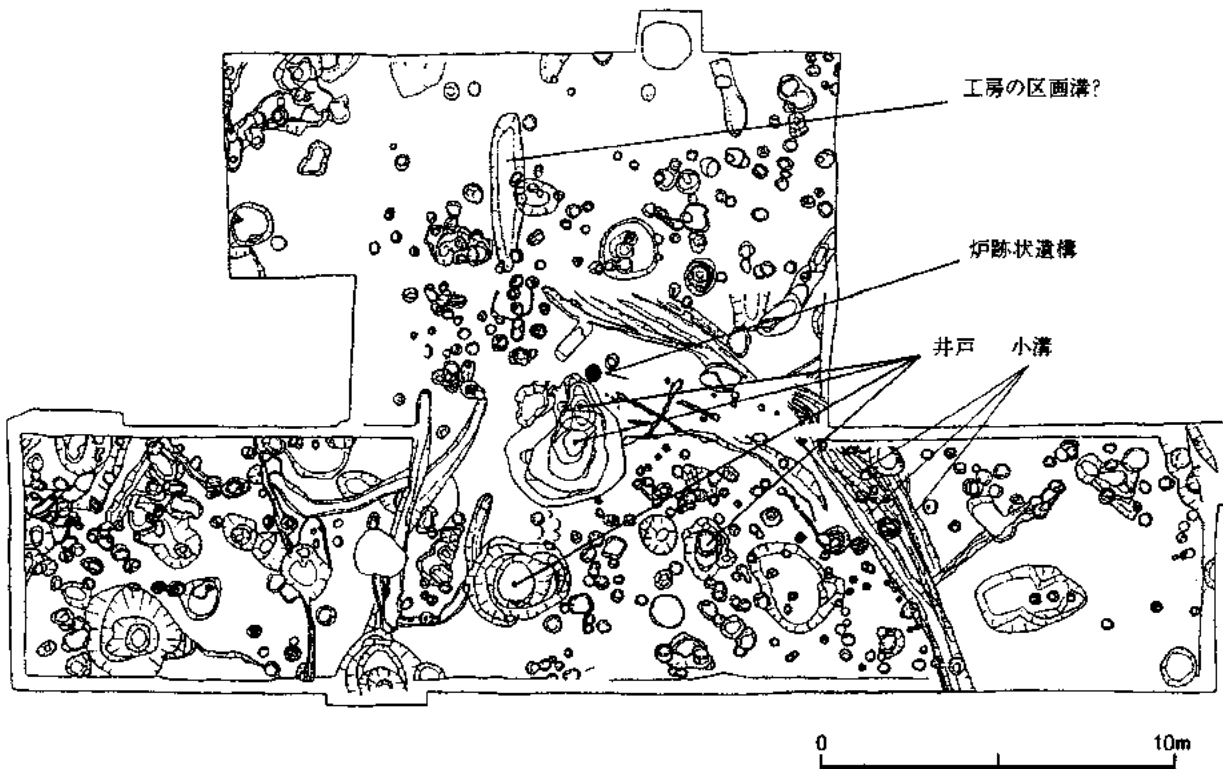


図 4 唐古・鍵遺跡第 65 次調査遺構平面図（藤田 1999 に一部加筆）

器鑄造関連遺物は少なくなり、わずか50m程も離ればほとんど出土しない。

田原本町教育委員会では、こうした遺物・遺構といった状況証拠の積み重ねから、先述の長方形を呈する焼土面を「炉跡状遺構」とよぶことにした。その後も慎重な検討は進められ、青銅器鑄造関連遺物の復元品による鑄造実験を行い、「炉跡状遺構」が炉跡である確証を進めている。しかし、あくまでも田原本町教育委員会の公式発表は「炉跡状遺構」としており、「状」をはずさない点に節度がうかがわれる。これに対し、よく近畿地方では被熱土器片・焼土塊・被熱砥石等遺物の単独出土をもって、弥生時代の青銅器鑄造が取り沙汰されることがある。判断は慎重でありたい。

## (2) 木器生産

唐古・鍵遺跡からは、農具・容器あるいは建築部材といった木器の未成品が多数検出されている。原材およびその蜜柑割から製品直前まで、すべての工程が揃い一見システムテックではある。時として、分業や専業の証として引き合いに出されることもある。しかし、なぜそういった未成品が集落内の各所から発掘調査によって検出されるのか。青銅器生産で見たように、専業度が高いのであれば、その生産地区はきわめて限定されるはずである。また、労力を掛けて形を整えたにもかかわらず、破損品でもないのに土坑や溝に木器の未成品が残されるのか。

私は、そこに専業や分業ではなく、木器未成品の管理形態がきわめて杜撰であったことを読み取りたい。さらに進んで、こうした未成品までは個人所有ではなく、共同管理にもとづくものであったという見方をしている。個人の所有物という意識が薄いゆえに、未成品の取り残しが生じたのではないか。この想定を補強するのは、環濠内における未成品の貯木である。第3次SD-02、第61次SD-109は遺跡南端で中期後葉から後期初頭に掘削された一連の環濠と考えられるが、どちらからも多数の木器未成品が検出されている。両者の距離は60mであり、この間の未掘部分にはさらに多くの木器未成品が想定される。私は、環濠帯部分を共有地であると想定したが、その環濠に木器を貯木すること自体が、個人所有ではないことを示すものとする。

大規模拠点集落における木器未成品の共同所有に関連して、その周辺にあって衛星集落とよばれる小規模あるいは短期的な集落の木器生産について触れておこう。というのも、唐古・鍵遺跡の周辺に点在する衛星集落において、木器の未成品が検出されないことから、唐古・鍵遺跡より製品の供給を受けていたと想定することも可能である。しかし、私はこうした小規模な集落において木器生産は行われていないのではなく、未成品が効率よく消費されているのではないかと考える。この点については、木器貯蔵穴とよばれる大型土坑が一つの手がかりとなる。

唐古・鍵遺跡の南部で行った第33次調査において、弥生時代中期中葉の木器貯蔵穴とよばれる大型土坑が検出されている。SK-124は、推定長軸4.5m、短軸3.3m程の楕円形で、深さは約1mである。下層から着柄鋤や長柄鋤、高杯の未成品、割材などが出土した。SK-134は、長軸3m以上、短軸1.3m以上の長方形と考えられ、深さは1.2mである。下層から着柄のまた鋤未成品1点と原材2点が出土した。

一方、木器未成品は出土しないものの、これと同じ規模の土坑は唐古・鍵遺跡周辺の短期的で小規模な集落からも検出されている。八尾九原遺跡第1次SK-201は弥生時代中期後葉の土坑で、

長軸 5.6m、短軸 3.8m の長方形を呈し、深さは 0.6m である。伴堂東遺跡第 2 次 SK-2340 は弥生時代中期後葉の土坑で、長軸 3.71m、短軸 2.0m の隅丸長方形を呈し、深さは 0.7m である。これらと唐古・鍵遺跡の木器貯蔵穴とよばれる土坑は、規模・平面形ともに類似し、その相違点は下層から木器の未成品が出土するのかもしれないのかの 1 点にすぎない。つまり、小規模な集落においても木器生産は行われているのであり、未成品の管理が大規模拠点集落より個人的で確実に消費されているために、残らなかったと想定される。

## 5. 集落変遷

唐古・鍵遺跡第 65 次調査地は、「3. 建物の竪穴住居跡」および「4. 專業制の青銅器生産」で触れたように、各時期において遺構の性格が異なり、興味深い変遷を示している。

第 65 次調査地では、弥生時代前期の遺構・遺物をほとんど確認することができなかった。これは、本調査地が谷地形にあたることと関連するのであろう。弥生時代中期初頭にいたって、この谷地形を利用して大溝群が掘削される。幅 3m、深さ 1m ほどの大溝が 4 本以上併走していたと考えられる。その幅は、第 65 次調査地で検出した北端大溝の北肩から、第 61 次調査地で検出した南端大溝の南肩まで約 40m にも及んでいる。この大溝群が機能を停止する弥生時代中期中葉前半には、厚さ 1m 近い灰色粗砂によって全面が覆われ、この地は居住域へと変遷する。かつて、唐古・鍵遺跡が弥生時代中期後葉の洪水に襲われるというイメージもあったが、居住域内から検出される砂層については複数時期に及ぶものと考えた方がよさそうである。この粗砂層をベースとして、竪穴住居跡に関連すると考えられる中期中葉の小溝や柱穴、土坑が多数掘り込まれる。ここで注意しなければならないのは、これまで唐古・鍵遺跡の発掘調査においては微高地を固定的なものと想定し、黄褐色土層を微高地、砂層を低地と考えてきた。これに対し、地理学の高橋学からは、寺沢・藤田の地形復元について「弥生時代前期の様子は、この自然堤防を構成する砂層がノイズとなり、今のところ詳細には明らかになっていないが、地形の逆転が生じている可能性が高い。すなわち、弥生時代前期の微高地が前期末～中期前半に生じた地形変化によって相対的に凹地になってしまったことが考えられるのである」という指摘（高橋 2003）もある。さすがに唐古・鍵遺跡において、同時期の遺構検出面より深く切り込み遺物を含んだ砂層と、自然堤防を間違えるような調査は行ってはいない。しかし、集落内に流入した河川によって自然堤防が形成され、前期の安定した遺構面を形成する黄褐色土層よりも高い砂層の微高地が、それまでの低地部で突発的に出現する可能性は十分想定しうる。本調査地はその候補となろう。ともかく、本調査地において弥生時代中期中葉から後葉まで住居関連の遺構は継続しており、安定した居住域となったことがうかがえる。

こうした状況が一変するのは、弥生時代中期後葉末である。本時期において青銅器生産が行なわれたことは、專業制において述べた。住居の排水に関連すると考えられた小溝が埋没し、それまで 1 時期に 1 基程度であった井戸が、弥生時代中期後葉末から後期初頭には「炉跡状遺構」付近に 4 基も集中している。井戸の中・下層からは、完形土器や卜骨等とともに青銅器鑄造関連遺物が出土し、なんらかの関連をもっていたことが想定される。この後、弥生時代後期前葉の遺構はほとんど

見あたらず、後葉には方形周溝墓が築かれて墓域となったようである。

第65次調査地は、弥生時代中期初頭から後期後葉の間に、大溝群、居住域、青銅器工房区、墓域という変遷を遂げている。そこからは、我々が「南北区」とよぶ場所において、施設の継続をうかがうことはできない。

## 6. 大いなる農村

近年、大規模拠点集落を複数の集団の集合体として把握しようとする案が、若林邦彦（若林 2001）や秋山浩三（秋山 2005ab）から提案されている。その大規模拠点集落の唐古・鍵遺跡を調査してきた私ではあるが、それらの案に関して何か特別な意見があるというわけではない。ただ、唐古・鍵遺跡を調査してきた藤田は当初から、北・南・西の三地区を単位として弥生時代前期から古墳時代初頭までの集落変遷を語ってきたわけであるし、高槻市安溝遺跡の分析（森田 1989）を行った森田克行も二単位の集団を想定しているのであって、1970年代後半から1980年代全般における大規模拠点集落の一般的な解釈であったように思われる。それが、1980年代の後半における吉野ヶ里遺跡の大々的な報道を経て、1990年代における池上曾根遺跡の弥生都市論へとたどり着いてしまったのであって、むしろこの間が特異点ではないのか。しかし、弥生都市論が負の遺産とばかりはいえない。大規模拠点集落が、単なる中小規模集落の複合体であり、分解すれば周辺の中規模集落と変わりがなくといえ、そうではなからう。また、唐古・鍵ムラの内部が複数の集団から成り立っていたとしても、平等坊・岩室ムラや坪井・大福ムラからすれば一つであり、また唐古・鍵ムラから見た他のムラも同様であろう。弥生時代の大型拠点集落の解釈に関しては、小さくすることも大きくすることも可能なものであり、要するに研究者の切り口次第と私は考える。

私は、血縁集団や地縁集団といったものが、遺構からどうして復元できるか、その術を知らない。そして、そのように解釈することによって、大規模拠点集落の正当な評価が成し得るのかもわからない。ただ、大規模拠点集落である唐古・鍵遺跡の発掘調査を通じて直接肌で感じたことといえば、イベント性の高い集落ということである。環濠や居住域内の溝、大型建物など、明らかに個人や小規模な集団では不可能で不必要な大型構築物をつくり出している。こうした大型構築物はつくり出して終わるのではなく、新たに維持管理を派生させるイベント装置でもある。集住することによって生じた労働力も、こうした装置に消費されていたと想定されるのである。また、それらの装置によって複数の集団から成り立つ集住であったとしても、その地に縛り付けられていたはずである。大型構築物はイベントを発生させることによって、共同体を繋ぐ紐帯であったと考えられるのである。私がいうイベントとは、表現を変えれば共同体の規制である。大規模拠点集落において、これだけ共同体としての規制が強ければ、調整者としての長はあっても、支配者としての長は生じ得なかったと考えている。

私が学生時代から約20年にわたって発掘調査に携わってきた唐古・鍵遺跡に対するイメージは、「大いなる農村」である。しかし、その基本となる生産域の問題については、未検出であることから触れることができなかつた。次世代への課題である。

参考文献 紙幅の都合で参考文献は最小限とし、報告書なども割愛した。

- 秋山浩三 2005a「弥生大形集落断想」『大阪文化財研究』27、1-32頁、(財)大阪府文化財センター。
- 秋山浩三 2005b「弥生大形集落断層」『大阪文化財研究』28、1-30頁、(財)大阪府文化財センター。
- 上田三平 1928「唐古遺跡の研究」『歴史と地理』第21巻第6号、31-41頁、史学地理学同致会。
- 金原正明・金原正子・岡山邦子 1996「四分遺跡(藤原宮第79次調査区下層)における花粉分析・寄生虫卵分析」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』26、39-40頁、奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮発掘調査部。
- 高橋健自 1901「大和考古雑録」『考古界』第1篇第7号、399-402頁、考古学会。
- 高橋 学 2003「弥生時代における環濠集落の立地と空間構造」『平野の環境考古学』162-171頁、古今書院。
- 寺沢 薫 1986「奈良県唐古・鍵遺跡」『弥生文化の研究』7、140-145頁、雄山閣。
- 外山秀一 1996「池上曾根遺跡のプラント・オパール分析Ⅱ」『史跡池上曾根遺跡整備委員会』33-39頁、史跡池上曾根遺跡整備委員会。
- 鳥居龍蔵 1917「閑却されたる大和国」『人類学雑誌』第32巻第9号、249-262頁、東京人類学会。
- 藤田三郎 1987「最近の唐古・鍵遺跡の調査」『シンポジウム弥生人の四季』86-99頁、檀原考古学研究所附属博物館。
- 藤田三郎 1989「唐古・鍵遺跡ムラの変遷」『弥生の巨大遺跡と生活文化—弥生時代の大都市か? 30万m<sup>2</sup>の唐古・鍵遺跡—』73-80頁、田原本町教育委員会。
- 藤田三郎 1990「唐古・鍵遺跡の構造とその変遷」『季刊考古学』第31号、49-56頁。
- 藤田三郎 1999「唐古・鍵遺跡の最近の調査」『弥生研究の中心遺跡を考える—「唐古・鍵遺跡」学の創設へ—』唐古・鍵遺跡史跡指定記念講演&シンポジウム資料。
- 藤田三郎 2007「奈良盆地の弥生環濠集落の解体」『ヤマト王権はいかにして始まったか』特別講演シンポジウム発表要旨・資料集。
- 豆谷和之 2003「弥生環濠論—唐古・鍵遺跡から見た場合—」『山口大学考古学論集』73-92頁、近藤喬一先生退官記念事業会。
- 豆谷和之 2006「唐古・鍵遺跡検出の大型建物跡と年代測定試料」『田原本町埋蔵文化財調査年報』14、2004年度、115-122頁、田原本町教育委員会。
- 森田克行 1989「大阪府安満遺跡」『探訪 弥生の遺跡 畿内・東日本編』29-42頁、有斐閣。
- 森本六爾 1924a「大和に於ける史前の遺跡(2)」『考古学雑誌』第14巻第11号、8-23頁。
- 森本六爾 1924b「大和に於ける史前の遺跡(3)」『考古学雑誌』第14巻第12号、12-31頁。
- 若林邦彦 2001「弥生時代大規模集落の評価—大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に—」『日本考古学』第12号、35-59頁。